

## 一 細菌学の講義

無事に進級した専門二年目の一九五七(昭和三二)年四月、細菌学の講義が始まった。その日、大  
学教授というよりもどこか古武士を思わす風貌の藤野恒三郎先生が、分厚い教科書を何冊か小脇  
に抱えて講義室へはいつてきた。そして、「皆さん、ローベルト・コッホの知っていますか。  
パストゥールの伝記を読んだことがありますか」と問いかけるように講義を始められた。

いまから考えると、私は藤野先生の講義を聞くべく運命づけられていたに違いない。この年、医  
学部の細菌学の講義を担当していた天野恒久先生が、ロックフェラー大学へ長期出張しておられた  
ので、この一年にかぎって、医学部とは別組織の微生物病研究所(微研)の藤野先生が代講を務めら  
れたことを後になって知った。

先生の講義は、毎回魅力溢れる内容だった。赤痢菌の講義の日、「このクラスには志賀潔先生の  
お孫さんがおられます」と、志賀君に語りかけながら、赤痢菌発見の経緯を話された。志賀潔の  
赤痢菌発見の論文は、一八八七(明治三〇)年一月二五日発行の『細菌学雑誌』(現在の『日本  
細菌学雑誌』)に掲載されている。先生はその内容を紹介しながら、コッホの三原則の復習とヴィー  
ダール反応を説かれた。「志賀潔先生の赤痢菌の発見は、コッホの三原則に則っていません。伝研  
(当時の大日本私立衛生会附属伝染病研究所、現在の東大医科研)の図書室にパリから着いたばかり  
の新着雑誌のなかに、ヴィーダールが腸チフスの診断法として発表した論文を見つけた志賀先生は、  
その方法を利用しました。赤痢患者の下痢便のなかの無数の細菌のなかから、赤痢の回復期患者の  
血清と凝集する細菌を丹念に探し、赤痢の原因菌を見つけたのです。赤痢菌の学名には、志賀先生

の名前が読み込まれています」と話す講義は、物語を聞くような面白さだった。

夏休み、郷里へ帰るのをやめて、暑い下宿の二階の部屋にこもり、ZinsserのMicrobiologyを読んだ。秋には、卒業したら藤野先生に弟子入りして細菌学の研究をしようと思いはじめていた。

## 二 通訳案内業

当時の医学部では、専門課程の一、二年のときに基礎科目の講義を終え、三年になると臨床科目の講義が始まった。さらに四年になると、臨床講義の講堂へ患者にきてもらい、教授の指導で学生が患者を診察しながら臨床の実地を習得するシステムだった。

学年が進むにつれ、藤野先生の下で細菌学を専攻しようという思いが強くなり、臨床講義をさぼって微研の藤野研究室へ出入りする日が多くなった。そうした日々を過ごしながら、今後のわが進む道について先輩のアドバイスを聞いているうちに、大学院に進学して藤野研究室で研究をすることを真剣に考えるようになった。しかし、臨床医になる道を選ばないことには解決しなければならぬ問題が二つあった。一つは臨床医になることを待ち望んでいる郷里の両親と祖父（祖母はすでに死亡していた）をどう説得するか、そしてもう一つは、大学院四年間の学費・生活費をどうするかであった。

六年の春、運輸省（現国土交通省）の通訳案内業試験（現通訳案内士試験）を受験することを思い立った。ちょうどその頃、米国人から直接英会話を習っていたので、その成果を試したいという気持ちもあった。マンツーマンの指導で、一時間千円という高い謝金ではあったが、英語が話せる